

Museum News

美術館 だより

Vol.203

今年も フотスクールを 開催します!

世界的写真家の作品鑑賞と
一眼レフカメラを使った撮影実習で
写真の楽しさを体験しよう。



プログラム(120分)

作品鑑賞(植田正治作品の紹介)[15分]→講師による写真講座・カメラの使い方説明[30分]→美術館内外での撮影実習[30分]→撮影した写真の発表・講評[45分]

- 対象:10人~25人のグループ
- 講師:写真愛好家
- 機材:美術館で用意したデジタル一眼レフカメラ(1人1台)
- 費用:無料(町外の方は入館料が別途必要)
※開催期間等については、調整中です。



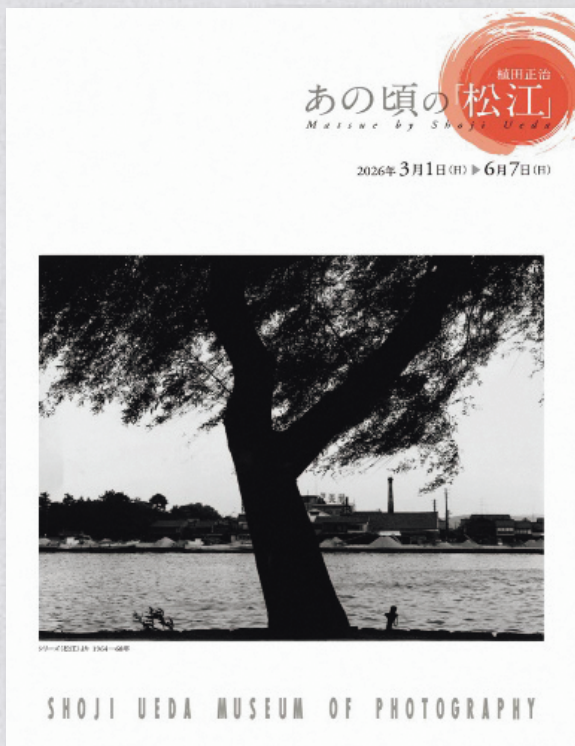
美術館展覧会情報

植田正治写真美術館
SHOJI UEDA MUSEUM OF PHOTOGRAPHY

A・B・C展示室(2・3階)

植田正治、あの頃の「松江」

6月7日(日)まで開催



植田正治の写真集『松江』は、随筆家・漢東種一郎のエッセイとともに、1978年(昭和53)年に出版されました。植田は1960年代から、松江そのものを被写体として、「水の都」と呼ばれるこの街の四季折々の表情や、そこで暮らす人々の素朴な姿を意欲的に撮りためていました。

この写真集の中で、「私にとって、子供の頃の松江は、いつも、行楽地であった」と当時を振り返りながら、境港に暮らす植田が幼い頃から遠足、花見、祭り見物などでよく訪れていたことを記しています。当然ながら、松江の街並みには親しみがあり、なじみ深い場所でした。格子のある家屋や老舗のたたずまい、小さきままな古い橋など、昔ながらの面影をたたえる松江の街はしみじみとした静けさを漂わせ、また

盆の花市、松江大橋を行き交う人々、堀沿いを自転車で走る人の姿からは、素朴さや温かい人情を感じられます。一方で、人気のない路地や街並みの風景は、歴史のある街並が持つ独特のぬくもりとは別に、幼き日に感じた「不安」や「怖さ」といった、心の奥に残る感情までもが映し出されているのようです。つまり植田の記憶は、具体的な風景や情景ばかりでなく、ある種の気配や感情とともに蘇り、現実の風景と結びついているのでしょう。移りゆく季節のなかで、カメラを手に小さな発見を繰り返しながら、現実の風景と自身の記憶を重ね合わせ、年月をかけて撮影し続けたのです。

みなさんの松江に対するイメージや思い出を植田の写真と重ねながら、「あの頃の「松江」」をご堪能ください。

問い合わせ先 伯耆町立植田正治写真美術館 Tel 0859-39-8000

[開館時間] 10:00~17:00(最終入館は16:30)

[休館日] 毎週火曜日(祝日の場合は翌日) ※5月5日、6日は開館します。

[メール] bijyutsukan@houki-town.jp [HP] https://www.houki-town.jp/ueda/

町民の方は『入館無料』です

ご来館の際は、広報ほうき3月号無料招待券、または免許証など住所のわかるものを提示してください。

広報ほうきは令和5年5月号から穴あけを廃止しています。広報紙をつくる際には、【●】マーク・【▼】マークを目印にパンチなどで穴を開けていただきますようお願いいたします。